

## 31 医学館旧蔵『鍼灸資生経』の鈔金沢文庫本について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

『鍼灸資生経』七巻は、南宋の王執中が著わした灸法を主体とした鍼灸書である。刊本に元版とされる広勤書堂刊本（中国国家図書館所蔵）、正統十二年（1447年）広勤書堂重刻本、江戸期整版などが現存する。また抄本として重要なものに鈔金沢文庫本数本があり、これには既に篠原孝市の報告がある（『鍼灸考97』）。

鈔金沢文庫本は、医学館旧蔵本が、国立公文書館内閣文庫（以下「内閣文庫本」、函架番号：304-258）に6冊、東京国立博物館に2冊（以下「東博本」、函架番号：052 4-106）、台湾故宮博物院（以下「故宮本」、『台湾故宮博物院善本書目』による）に小島宝素旧蔵室町後期頃抄写の零本1冊が所蔵される。

内閣文庫本及び東博本は、四鍼眼装。茶色薄手表紙。外題は四周単辺の題箋に「鍼灸資生経 乾（各冊子に八卦を記す）」と墨書きする。書高27.5cm×幅19.0cm。「医学館」「躋寿館書籍記」「多紀氏蔵書印」の蔵書印が各冊子にある。本文は有界、四周単辺。版心魚尾なし。每半葉匡郭、10行・行20字、小字は双行である。故宮本は、四鍼眼装。楊守敬装訂の濃藍色薄手表紙。書高28.1×幅19.8cm。外題なし。書式は前者と同様である。「金沢文庫」「小島氏／図書記」の蔵書印がある。

内閣文庫本は、第一冊目では徐正卿序文、目録、巻一冒頭部分は欠落し、「腹第三行左右二十四穴」から末尾までが残存する。第2冊から第6冊（巻三～七）は各巻毎に1冊づつ綴じられている。なお巻三末尾に「金沢文庫」との筆書きがある。東博本は、一冊目に目録、巻一の内容はあるが、徐正卿序文はない。第1葉目の表裏に細字で禁鍼灸穴や孔穴の取穴法が挙げられているが、これらは本書の内容とは関連がない。その後目録、巻一の本文と続くが、「腹第二行左右二十二穴」までで途切れている。第二冊目には巻二の全文がみられる。内閣文庫本と東博本は、旧抄本を重抄したものであると考えられる。内閣文庫本と東博本を合わせると、徐正卿序文を除く全内容を伺う事が可能で、旧態を考究する上で大変重要な資料になると考えられる。一方、故宮本は、徐正卿序文、目録があり、本文は「腹第二行左右二十二穴」までがみられる。巻末に「二校畢／亥卯□□廿五」の識語があり、各孔穴の図が彩色である点は前記2書とは異なるが、字体などすべて東博本1冊目と同一の内容である。

医学館関連の目録を調査すると、国会図書館所蔵『聿修堂目録』に「七冊。影抄金沢文庫本。宋王執中。」、慶応義塾大学付属図書館所蔵『聿修堂蔵書目録』に「八冊。影抄金沢文庫本。宋王執中。」、同所蔵『聿修堂目録』に「七冊。影抄北条頼時金沢文庫本。宋王執中。」、早稲田大学付属図書館所蔵『聿修堂蔵書録』に「八冊。影抄金沢文庫本。宋王執中。」、内閣文庫所蔵『聿修堂蔵書録』に「七冊。北条頼時金沢文庫本。王執中。」とある。更に医学館の書籍が浅草文庫に移転した時期にあたる明治10年（1877年）に刊行された『躋寿館医籍備考』に「八冊。宋王執中撰。影抄金沢文庫本。」とある。目録により冊数に異同はあるものの、内閣文庫本と東博本は、元来、医学館に一括して所蔵されていたと考えられる。明治2年（1869年）に文教施設を併合して大学校が設立され、医学館の書籍は、大学東校に保管された。のち明治5年（1872年）に書籍館に、明治7年（1874年）に浅草蔵前に移転し、浅草文庫と改称した。明治14年（1881年）に現在の東京国立博物館に移転し、その後一部は内務省に返還されたという。元・趙大中撰『風科本草』二巻（福井楓亭旧蔵抄本）の上巻が内閣文庫に、下巻が東京国立博物館に分離して所蔵されているのも、その際に分散したと考えられる。